

ぶらりびと

文化芸術に携わる方々にお話を伺い、
 掛川市の文化振興のヒントをいただくこのシリーズ。
 第25回目は、資生堂企業資料館・資生堂アートハウス
 館長の大木敏行さんにお話を伺いました。



資生堂企業資料館・資生堂アートハウス 館長
 かけがわ茶エンナーレ2020 顧問

大木敏行さん

自身が文化芸術に接した原体験を
 教えてください。

掛川への赴任が決まり、その時
 に開催していたアートハウスの展
 覧会「京都艶艶」(2013年10月)
 が本格的にアートに触れるきっか
 けになりました。

アートが専門でなかった私を覚
 醒してくれた作品がそこにありま
 した。それは、「走泥社」の中心的存
 在として知られている前衛陶芸家
 「鈴木治」の「天七作」という作品
 です。自然現象に着想を得たこの
 作品は、清らかな青白磁で、穏やか
 にして鋭いイメージが豊かに広が
 ります。この展覧会で、「加守田章
 二」も知ることとなりそれ以来、陶
 芸が好きになりました。

なぜ、資生堂は掛川市にあるので
 すか。

掛川の土地は工場建設のために
 取得するのですが、当時存在して
 いた大船工場と大阪工場の間で、
 新幹線か東名高速から見えるここ
 ろという基準で選ばれたようです。

1975年の工場建設に続いて、
 1978年にアートハウス、19
 92年に企業資料館(いづれも入
 館無料)、2017年にはカンガル
 ームもオープンしました。一説で
 は、生産第一で無味乾燥になりが
 ちな場所と思われる工場だからこ
 そ、アートハウスを併設したいと
 いう考えもあつたようです。ビジ
 ネスとアートとのつながりを意識
 できる場を創り、当社のブランド

価値向上を図りつつ地域への貢献
 も視野にいれたとも考えられます。

日本人の美意識とは。

以前読んだ本で、アメリカの有
 名な建築家フランク・ロイド・ラ
 イトが、自伝の中で、岡倉天心の
 『茶の湯』について書いています。

ライトが日本にきてこの本を読ん
 だとき、建築というのは、壁や天井、
 床の形ではなく、室内の雰囲気な
 のだと。空間というものが建築な
 のだということを理解するのです。
 目に見える部分ではなく、見えな
 いけれどもそこに確かにある空気
 を心で感じるところに建築の本質
 があるということです。

これは日本の文化、日本の美意